

前多さんはまた、地域社会のため、金沢市における幾多のボランティア団体の役員、会長等に奉仕し、スポーツ界にも積極的に貢献され、いまなお矍鑠としてゴルフを楽しむほか、石川県カヌー協会等の役員として若人の指導に当たっておられる。

(石川県 山本 利男)

## 四年間のシベリア強制抑留回想記

石川県 通 実

### 北緯五十度線防衛

北緯五十度線国境を守護する要四二部隊は、対米戦に備え、太平洋沿岸東海岸、オホーツク海を軍備の重点目標にしていた。その一方で、間宮海峡を挟んで西海岸方面は、須恵取、真岡の二カ所に要四二部隊は対空監視所、重機関銃中隊が勤務していた。

日ソ不可侵条約締結の結果、軍備は手薄である。日本の戦局が敗戦近しと見るや、ソ連は日ソ不可侵条約

を破棄し北緯五十度戦を越境したのだ。火事場泥棒だ。濡れ手に粟に似たり。樺太防衛の軍備、兵員は南方方面に、北千島にと主力部隊が分散し、防衛が手薄にならざるを得なかったのだろうか。

昭和二十年八月十五日の終戦

終戦当日は普段どおり町民の方々の防空壕構築作業を指導していたが、昼食に帰った町民達が戻って来ない。不思議に思って連絡員を出すと、ラジオ放送で終戦の大詔が下ったとのこと、デマだと互いに論じたが会話にならない。部隊に帰ると、先ほど天皇陛下の玉音放送があったと言う。一瞬、頭の中は真っ白になった。その後二、三回空襲され、機銃掃射を受ける。民家にはちらほら白旗が立つ家が出始めた。

終戦後のいつごろか日付は忘れたが、旧樺太西海岸、須恵取町にソ連海兵隊の敵前上陸が開始された。我が方は対空監視の重機関銃一銃のみ、銃身が焼きつくまで乱射を続けたが多勢に無勢、援軍頼むと、我が落合駐留部隊に応援の要請があり、一部留守部隊を残して我々は間縫駅まで来たが、須恵取はもう駄目だか

ら帰還せよとの命令で残念ながら引き返した。留守部隊の故吉原・故松井君の話では、ソ連航空隊が学校や町の中心部に猛爆撃を行ったとのことだった。

翌日、豊原方面も空襲され、我々の目にも爆煙の立ち上るのがはつきりと見えた。

#### 不寝番珍事明暗

旧樺太落合小学校に駐屯するも、従前とあまり変わらぬが軟禁状態である。しかし、武装解除や武器弾薬の供出はもちろん、強制労働もなかった。しかし不寝番は義務づけられていた。ある晩一つの事件があった。上下不寝番とも勤務中に暁の脱走をした。朝になっても起床の連呼がないので久しぶりにぐっすり朝寝をしたが……。後日判明したが、当事者四人は落合近在の出身者だった。旧軍隊なら軍法会議に付され重罪人である。シベリア強制抑留の難を免れたのだから、本人達には先見の明があったのだろうか？ 正直者・軍人精神を全うした者がシベリア強制労働に従事して明暗を分けた。神も仏もあつたものではないと思つたが、私のひがみ根性のなせる業だろうか。

#### 落合小学校に軟禁状態

強制労働の仕事らしきものはない。ただ寝て食べるだけの日々だった。たまには糧秣受領の使役に屋外に出るだけ。空爆で食糧倉庫付近に車両が転覆、破損して溝に転がっている。セメント袋が五、六袋、道路に放置されっ放し。足で蹴飛ばしたら白い粉末がチラリと見える。舐めてみると、それは白砂糖であつた、大収穫である。糧秣はすべて白米を受領し、餅米も多く飯盒で半殺しにして、小豆で餡を煮る。久しぶりだった。だが、餅米にはだんだんと飽きがきた。終戦前は節約で飯盒の蓋ぐらいしか食べられなかつたのに、全く嘘のようだ。そして、こんなにたくさんの糧秣があつたのに敗れたのかと涙が滲んだ。旧樺太は、戦時体制に備えて三年間、宗谷海峡を封鎖されても持ち堪えるだけの物資を蓄積していたとのことだった。

約一カ月近くの軟禁生活を経て、将兵は大泊女子高等学校に抑留、樺太全島の将兵並びに北千島部隊と全警察官は一カ所にかき集められた。大泊港付近では、約一カ月間、軽作業や夜間作業に駆り出された。

そのうち、祖国本島に帰還する夢を胸に抱いて輸送船が岸壁に停泊、乗船のためにと急きよ便所を造り、糧秣積載が開始された。翌朝、待ちに待った乗船。本国に帰っても食糧や衣服等が不自由だから持参できるだけ持参せよとの連絡に、夏物、冬物、これ以上持てないほど持参して乗船した。

輸送船は滑るよう到大泊港を後にして、やがて宗谷海峡のど真ん中に差しかかったころ、船のエンジンが停止した。一晚を明かした翌朝、船は運航を開始したが、不思議にも能登呂半島を迂回する。やがて船は半島を右手に眺めながら快調に走る。大谷航空隊員の夜光式時計、羅針盤磁石の判断では、船舶は北北西に進路をとっているとのことである。私なりの解釈では、西海岸に日本兵士が真岡、須恵取等に駐留しているの、その兵士を乗船させるのだと軽い気持ちでいた。だが、それはまんまと裏切られた。船は一路北進するのみ。すべての望みは断ち切られた。二日もかかっただろうか、船はやがてシベリアの辺びな岸壁に接岸した。そこには満州方面から一カ月も早く現地捕虜とし

て作業に従事している日本人兵士がいた。やがて本格的な抑留、強制労働が始められたのである。

終戦後、ソ連駐留軍は、日本の物資の豊富なのに驚いていた。こんなに物資が豊富なのにどうして戦争に負けたのかと……。それにしても彼らの軍装のお粗末さには当方が驚く次第である。ロシア兵は、落合小學校の抑留中チャースイ(腕時計)・レイザー(剃刀)等、日常生活品を非常に欲しがった。私の時計は昭和十年ごろ上等なものを五円ぐらいで買ったのだが、それを売ってくれと言う。私は、秒針が動かない状態で、ゼンマイを巻くが、音はずれども針が動かない。それを見せると「ハラシヨウ」と「ダワイ・ダワイ」を連発して、ポケットから無造作に十円の日本紙幣を取り出し、時計を手にするや否や、紙幣を私に投げ捨てるようにして走り去る。私は、故障のものにこれが高額だ、お金を返済しようと思いかけると、取り返しに来たのかとばかりより早く逃げ去る。私達は大笑いしたが……。この紙幣は、進駐した折、民家が銀行かに押し入り押収したものである。あるロシア兵士は、

両腕に腕輪のように、ガラスの割れた時計や長短針のないもの、ゼンマイが切れたもの等種々雑多のもので、ただ時計の形をしておればそれでよかつたようだ。日本兵も段々ずるくなって、動かない時計でも、五、六度振って歯車の回転音を相手の耳元に当て針音を確かめさせると、「オーチン・ハラショー（大変よろしい）」と、喜んで金を渡してくれた。いかにロシア国内には物資がないかを知らされたものである。

野戦で、将校階級の軍服を着用して立ち回っている女性には目を見張った。戦時中は日本では女性の軍服姿は皆無なのに、現今では男女同権で自衛官や警察には制服姿は普通だが、当時では「驚き」の一言である。また、軍律は直屬上官以外には敬礼しないのにも驚きだった。さらに、歩哨兵について少し述べれば、収容所の四つ角に櫓を建てて、昼夜交代で我々を見張っているのだが、立哨中は煙草を吸い、鼻唄を歌い、口笛は吹く。日本の軍規では思いもよらぬことだ。服装は羊の毛皮のシュエバの襟を立てればすっぱりと頭が隠れ、身の丈は足元まで隠れるという防寒服

を着用していた。

#### 壊血病におびえる

日常生活に不可欠な新鮮な野菜を食しなければ、ビタミンC不足で壊血病を引き起こす。まずはビタミンCを摂取することが急務である。松葉を低温で煮た液を朝晩二回、食事前に飲む。また、ドロジー（黒パン作り発酵）を飲まされた。病状は、紫色の斑点が十円玉ぐらいに体に浮き出る。その後、出血死を招くまことに恐ろしいものだ。

シベリアは五、六月ごろになると陽気も春めいて、若草もポツポツ芽生えて来る。空腹のあまり新芽を摘み、飯盒で煮て食した。ロシア兵は笑って、「ヤボンスキー（日本人）はコニー アジナーク（馬と同じ）」と言うが、背に腹はかえられない。たまたま海岸周辺の作業に従事した折、海が荒れた翌日、浜辺に昆布が流れ寄る。半日ぐらい飯盒で煮つめるのである。ある程度空腹を満たすが、食べ過ぎて消化不良並びにヨード過剰のため入院する者も出てきた。人間、窮すれば何でも食うものだ。ヘビ・カエル・ネズミ・馬肉は良

く食べたものである。しかし、犬猫だけは食べなかつた。戦友の話では、犬猫を煮ると泡が出るそうである。ある部落では犬の姿は見えなくなった。今は口が肥えて文句を言う。「喉もと過ぎれば熱さを忘れ」である。強く肝に銘じなければと時折反省する。

#### 民主主義闘争に思う

階級闘争と称して威張っていた将校を糾弾して、旧軍隊組織を民主的に改変した。他の収容所では「晩に祈る」というワンマン将校もいたと聞くが、将校たる特権階級の權威を傘に兵隊に無理解な労働を強要したとして、下級階級、即ち初年兵を先頭に一般兵士が団結して、収容所内部の業務改善その他管理運営を掌握した。この運動にはソ連政治部員立会いのものの大衆裁判で将校連中の悪政を暴露し、反動分子として吊し上げ、他の収容所へ追放した。

ハバロフスクに「日本新聞」を活字で発行する機関紙があり、帝政ロシア革命や共産主義を勉強し、アクチブ（リーダー格）が養成される。即ち、彼等は半年

間、ハバロフスク（コムソモール、共産主義青年同盟）に派遣され勉強して、再び自己の収容所に帰る。そこで『日本新聞』を議題に討論会やサークル活動、壁新聞活動が活発に展開された。アクチブの兵士の顔は明るく活動的だった。しかし、前述の「晩に祈る」に類したショックな私的制裁が、他の収容所にもなかったとは言えないのではないか。

とにかく、各収容所にソ連政治部員が派遣されてからは、民主運動も手伝ってか、作業成績は順調である。「日本新聞ニュース」では、日本兵がぼつぼつ祖国日本に帰還していると発表された。風の便りでは、作業成績の優秀な者が帰還するのだと……。後日判明したのだが、怪我や病気で労働に不適合な人達や入院患者等が送り返された。「働かざる者は食うべからず」の鉄則だと思った。だが、日本へ帰れるのだという一縷の希望を持つようになった。

#### 逃亡者の心境

大泊女子高等学校は、引揚船が入港するまでの一時の仮収容所と置いていたので、まさか捕虜収容所とは

夢にも考えていなかった。ソ連上層部による緘口令がしかれ、一サルダート（兵士）に至るまでものすごく口が固い。上層部敵令のせいか、「スコーラ ダモイ（すぐ帰れる）」の一点張りだった。それにも増して通訳は、終戦前日まで警察の留置所に拘束されていた朝鮮人だったので、旧警察官、憲兵、将校は目の仇、特に辛く、言語や態度に露骨に表れていた。通訳も、引揚船が入港したら「お前たちは本国へ帰れるのだ」と嘘八百、絶対「シベリア行き」とは口が裂けても言葉の端にまで注意を払っていた。彼等にはとうに分かっていたのに……。

考えてみれば、大泊港から稚内港まで戦前の定期連絡船では約八時間で航海しているのに、引揚船になぜ急ぎよ便所まで設置しなければならぬのか。また、宗谷海峡の真っ只中で一時停泊をして時を過ごす……不思議な話……。

本国に引揚げを目前にしなから命がけ、危険を冒してまで脱走した人達……。彼等には先見の明があったのだろうか、それとも親兄弟が樺太在住で、北海道に

引揚げてもまた逆戻りして樺太へ引っ返さなければならぬせいだったのか？ 本人のみが知るだけで、他人にはとうていその胸のうちが理解できない。

私も、親、兄弟姉妹が西海岸の真岡に生活している。たまたま夜間作業で貨車の荷下ろし中、暗夜に乗じて脱走者が出た。脱走するなら今がチャンスと思っただこともある。だが脱走の条件としてまず民間人に変装しなければならぬ。軍服はもろろんのこと、襦袢・袴下・越中褌までをかなぐり捨てなければならぬ。また、大泊から徒歩では距離が余りにも遠過ぎる。汽車では各駅にソ連兵士の警戒が厳重である。豊原經由、豊真線で密行を思案したこともあった。結局、優柔不断。我ながら情けないと思うのが偽らざる心境である。

回想録の筆を留めるにあたって忘れ得ないのは、酷寒の地での強制労働と栄養失調との闘い。「ダワイ ヨッポイマーチ」「スコーラ ダモイ」のロシア語は、私の脳裏に強く焼きついて忘却できるものではない。

再び言う。零下四、五十度の酷寒の地で強制労働と栄養失調と闘い、ロシア兵の罵声を耐え忍び、四年間の長期にわたる海外旅行をして来たと思つて、自分自身に言い聞かせて慰めるしかしようがない。今の私は、諺に言う「上を見ればきりが無い。下見て暮らせ」である。

【執筆者の紹介】

出生 大正八（一九一九）年八月八日樺太真岡町にて津田勇吉三男として

本籍 七尾市一本杉町

改姓 昭和十年五月二日、叔父・通嘉四郎の養子となる

入隊 昭和十八年十二月、樺太にて召集 旭川部隊に入隊

終戦 樺太落合町

抑留地 二十年冬、大泊港よりシベリア沿海州に上陸、抑留される

抑留中 沿海州各地を転々として鉄道建設等に従

事する

復員 昭和二十四年八月、召集解除

現在 長く教員をしていた妻を三年前に亡くし、現在は息子夫婦と同居

職業等 長く自営業を営むも、現在は隠居して写経等を趣味とするほか、市健老大学講座

等では「シベリア抑留体験談」を講演している。

（石川県 山本 利男）

シベリア抑留記

福井県 横田 肇

戦後、ソ連の抑留に遭い、昭和二十四（一九四九）年秋に帰還して、はや五十年あまりが過ぎ去り、今、その当時を振り返ってみると、記憶の鮮明な部分と曖昧な部分曖昧が折り重なってくる。

曖昧な部分は、連鎖的に記憶をたどりながら記して